

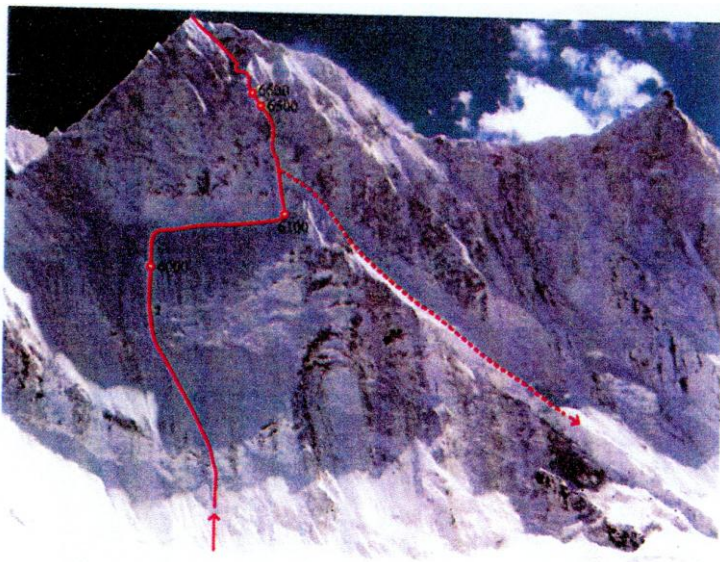
「インドヒマラヤ、ナンダデビ山群カランカ峰（6931m）北壁初登攀」
— 2009 年第 17 回ピオレドール授賞、そして今 —

ICI 石井スポーツ㈱、明治大学炉辺会
天野 和明

PowerNavi がサポートする GIRI GIRI BOYS インドヒマラヤ登山隊 2008（佐藤裕介、一村文隆、天野和明）が、インドヒマラヤ・ナンダデビ山群カランカ北壁（6931m）のアルパインスタイルによる初登に成功し、無事に帰国しました。途中で嵐にぶつかり、5 日間の予定が 10 日間となってしまう、食料不足で 1 日 500kcal の食事しか摂れない過酷な状況に置かれていましたが、全員が凍傷を負うこともなく登頂・下山することができました。

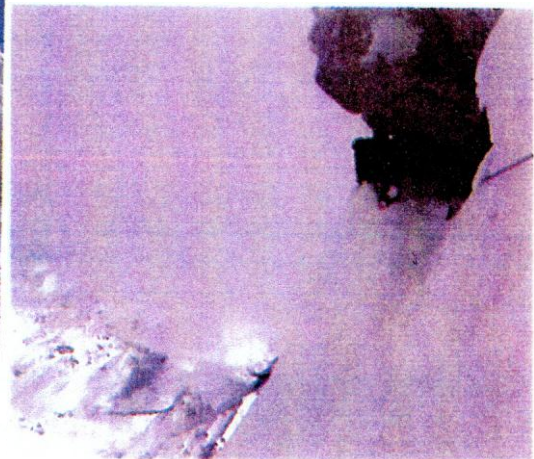
高所登山では徹底的に荷物を減らし、軽量化を目指すことから、食料も最低限に抑えなければなりません。純粋なアミノ酸である BCAA は重量比において、きわめて効率よくたんぱく質を補給できるため、筋肉破壊を最低限に抑えることができたのではないかと思います。

<http://powernavi.erde.co.jp/girigiri0810.html> より



カランカ北壁全容（右のピークはチャンガバン）

○印はビバーク地点、破線は下降ルート



6600m の“ホテル・カランカ”

ここで 3 日間の嵐をやりすごした

天野和明 (Kazuaki AMANO)

1977 年山梨県生まれ。明治大学山岳部出身。ヒマラヤでは、ローツェの無酸素登頂、アンナプルナ南壁、シシヤパンマ北壁アルパインスタイルなど 8000m 峰 6 座に登頂。その後、エル・キャピタンでのビッグウォールやカナダのアイスクライミングを経験し、アルパインクライマーとしての実績を積み重ねている。平素は ICI 石井スポーツ原宿店に勤務。夏は富士山でガイドの仕事もこなす、パートタイムクライマー。

参考資料； 天野和明著、JAC「山岳」Vol.104、2009. P17～26 より抜粋して転載。

GIRI-GIRI BOYS? What' s mean GIRI-GIRI?

今回、インドで何度こう聞かれたらろう？ 最初は説明していいのかわからないが、「On the Edge! GIRI-GIRI means on the edge!」、そう答えることにした。だいたいメンバーふたりは三十路で、いちばん若いひとは妻子持ち。BOY かどうかはギリギリなところだろう。

今回はなにかと「ギリギリ」なことが多かった。許可の取得も、ビザの取得も、成田空港での荷物のやりとりも、お願いしてあったロープが自宅に届いたのも、そして頂上へ着いたのも日没ギリギリ。下降時はデポしてあった食料にギリギリのところまでたどり着けず、BC へ帰ってくる時も明るい時間にギリギリ着けるかと思ったら、そんなことはなかった。

事の発端は 2007 年 2 月の第 0 回ウインタークライマーズミーティング（『ROCK&SNOW』039 号参照）だった。国内のアルパインクライマー 21 人が明神岳に集結したこのイベントで、初日に明神岳西壁をイチー（一村文隆）と組んで登った帰りに「今年の予定は？」と聞くと「アラスカはもう飽きた。今年は秋に、（佐藤）裕介とインドのカランカへ行こうと思ってる」と聞いたのだ。僕は僕で、インドへ行ったことがないから興味があり、丁度インドヒマラヤの別の山に行こうと思ってパートナーを探していたところだった。そんな折「じゃあ、こっちに来て一緒に行きませんか？」と祐介に声をかけられたのだ。

正直「カランカ」と言われても、インドのどこにある山かまったく知らなかった。3 月にシャモニから帰ってきて山の写真を送ってもらう。正直ビビった。う～ん、これはヤバイ。第一印象はそんな感じだった。それでも何度も見ていると、不思議と登れそうもないことはない気がしてくる。そしていつの間にか、ただヤバそうだとしか思わなかった気持ちが「行けるんじゃない？ おもしろそう！」と変わってきたのだった。

なにしろパートナーの実力は申し分ない。アラスカでの数々の記録などから、二人は日本のトップクライマーとして世界のメディアからも注目されている。しかし、クライミング能力では敵わないけれど、高所での経験ならこっちに分がある。なによりも、学生時代に明大山岳部で辛く激しく培われた気合と根性が私にはある。このメンバーでそのあたりを組み合わせたら、相当おもしろいことができそう。一度ポジティブな興味が湧き出すと、もう止められなくなってきた。

インド、ガルワール・ヒマラヤの峻峰、カランカ（6931m）。西隣にある山チャンガバン（6864m）と並んでそそり立っているため双子峰にも見えるが、それぞれに個性的なこの山に東峰、西峰などと名づけず、双方に美しい名前をつけた測量官のセンスは素晴らしいといえよう。チャンガバンも、標高こそ高くはないが、その美しくぶっ立った容姿から、多くのクライマーに注目されてきた。

1974 年に東稜からクリス・ボニントン、ダグ・スコット、ドゥーガル・ハストンらが初登頂。78 年にはヴォイチェフ・クルティカ、アレックス・マッキンタイアらは南バットレスをカプセルスタイルで初登。日本人では、76 年の春に戸田直樹率いる 6 人のチームが南西稜の美しいラインから登頂している。そしてこの山をいっそう強烈に印象づけたのは、97 年のアンディ・ケイブ、ブレンダン・マーフィとミック・ファウラー、ステイブ・サスタッドの 2 パーティ 4 人による、大胆で悲劇的な壮絶すぎる北壁の初登だった。S・ヴェナブルズの名著『ヒマラヤ・アルパインスタイル』（山と溪谷社刊）のなかでは、このルートは「ヒマラヤでこれほど美しく、かつ過酷な要求をする山はあまりない」と形容されている。

また、東隣には稜線伝いにサーフミナル（6911m）があり、この山の北西壁は 04 年秋にイアン・パーネルらによって初登されている。

そしてカランカ。その北壁は、この山域に残された大きな課題だった。02 年に『Alpinist』誌の連載

「マウンテンプロフィール」でチャンガバンが紹介されて以来、イッチーがひそかに温めていたプランだった。近年でもジョン・ヴァーコ、カルロス・ビューラー、ケントン・クール、ニック・ブロックといった著名なクライマーがトライし、スティーブ・ハウス、マルコ・プレゼリは、計画しつつも許可が取得できずに断念している。

これだけ力のあるクライマーがトライしながら完登されないのはなぜだろう？ それほどまでに難しいのだろうか？ それとも、安定しない天候のせいだろうか？ 06年には新ルートから隣のチャンガバンの山頂に立ったメキシコ人が下降中にその行方を断ち、07年にはBCで数日間のうちに2mあまりの雪が降っている。ここにはきっと何かがあるのだ。そしてその何かを克服しなければ山頂には立てないことは、歴史が証明している。

9月14日、ベースキャンプを出発し、取付へと向かう。氷河左岸の丘に上がると、目指すカランカ北壁が再びその姿を見せた（BCからは見るできない）。3人で双眼鏡を回し見する。「すげえミックス！ いやー、けっこうヤバそうだね」。イッチーがそう切り出すが、声は弾んでいない。下から見上げたカランカ北壁は絶望的なほどにそそり立っていて、触れてはいけないうように神々しい。不安や恐怖は大いに募った。しかし、それ以上に僕らのモチベーションは高かった。

北壁へ（9月15日）

翌早朝、不要なものを取付にデポして北壁へと向かう。さあ、夢のクライミングトリップの始まりだ。デブリを踏みしめてノーロープで高度を稼ぐ。傾斜もきつく、雪が氷に変わるようになってきたころ、ロープを出した。2ピッチ目、イッチーが叩き落とされそうなほどのスノーシャワーを嫌って、見た目に簡単そうなラインを避け、ミックスから垂直に近い雪壁へとロープを延ばす。トラバースぎみにランナウトして登っているのだから、ユマーリングしていても、その悪さがよくわかった。さすが。

ロックバンドを越えると広大な氷雪壁帯だ。気泡と雪が混じり合ったような氷は、息を切らしながらアックスを振るってもなかなか安定したものにならず、必然的にランナウトする。アバラコフなんて作れる氷質ではなかった。

21時を回ったが、イッチーが連結したロープを引きずって登り続けている。第二ロックバンド下には、シュルンドや整地してもテントを張れるようなスペースはなく、あきらめて両わきをラビーネンツークに削られた幅1mほどのスノーアレートをせっせと切り崩した。だが50cmほど掘ると中途半端な氷が出てきて、それ以上は掘れない。幸い天気はいいが、初日だというのに取付から900mほど高度を上げたこの6000m地点でオープンビビューとなった。何か口に入れなければ……、水分を摂らねば……と思うが、あまりに眠い。僕と祐介がうつらうつらと寝てしまっても、イッチーは水を作ってくれていた。

氷雪壁に行く（9月16日）

2日目もひたすら氷雪壁を登る。上部ミックス帯はすぐそこにあるようだが、なかなか近づいてこない。当初考えていた、山頂にダイレクトに抜けるクーロワールは、下部が薄いベルグラで節理にも乏しく、プロテクションがまともにとれそうもないうえに傾斜が強すぎることから、右へと弱点を探してトラバースを繰り返す。コンテを多用したため、ふくらはぎを休める間もない。昨夜、残業で遅くなったので、今日は落ち着いて水分補給をしたかったが、やはりテントを張れるような場所はない。高度は6150m。見上げる北壁上部のミックスウォールは夕日を受けて黄金色に輝き、とても美しい。

ヘッドウォールに向かう（9月17日）

3日目、氷雪壁を2ピッチこなして、いよいよヘッドウォールに入る。初めは快適なミックスだったが、次第に悪くなってきた。スラブに薄く張ったベルグラをデリケートなクライミング。ランナウトしつつも、取れるところでは的確にランニングを取っていく。壁の真ん中にあるハングした大きな露岩（下からでも容易に識別できる大きさだった）を避け、リッジを右に越えて細いクローワールに入る。このころから天候が急激に悪化してきていた。

スノーシャワーは激しさを増し、見上げることもままならず、足元さえも見えない。そんななかでも着実にロープを延ばす裕介の姿は感嘆するほどカッコよかったが、絶え間なく流れる雪はシャッターを押す暇すら与えてくれなかった。夜の帳が下りてくるのも間近だったが、こんなクローワールの真ん中でのオープンビバークは自殺行為だ。これまでは悪天を楽しむ余裕があったが、こんな状況でひと晩過ごしたら、流雪とともに流されるか、耐えたとしても、明日の朝は間違いなく即下降というように気持ちを削がれてしまうだろう。

少しでも快適なビバーク地を見つけようと、闇夜のなかをヘッドランプで探し回る。非常に急峻な細い雪のリッジを削って半雪洞のようなものを掘ろうと思うが、やはりすぐ氷が出てきてしまう。セルフビレイ用にスクリューを入れようとする、岩に当たって先がつぶれてしまった。苦しまぎれに短いスクリューを並べて何本も入れてみたが、表面の空気混じりの氷にはどれだけの効き目があるのか？ この夜は、まともにアンカーもとれない外傾した不安定な場所でのビバークとなった。ICI 石井スポーツで底が開くように特注改造してもらったゴアライト X テントのおかげで、だいぶマンにはなったが、テントの半分弱は宙に浮いていたため、身を寄せ合って折り重なるように窮屈な夜を過ごした。

ホテル・カランカ（9月18日）

僕らの淡い期待をあざ笑うように、次の日も嵐はやまない。さすがに昨夜は、といっても3時間ほどだが、満足に眠れず、ずり落ちそうになる度に目が覚めて、その度に3人そろっていることに安堵した。

もはや、この天気ではまともに行動することが無理なのは目に見えていたが、だからといってこの場所で停滞し続けることなど論外だ。仕方がないので出発する。

傾斜は増し、落ちてくる雪の量は、シャワーというような生やさしいものではなくなった。大量の降雪でフッキングエッジが見えず、ピックやクランポンが外れるのが怖くてスピードがなかなか上がらない。左手は効いているが、右手のアックスは岩の突起にかろうじて引っ掛かっているだけのようだった。そうはいっても、ここはこれで行くしかない。腹をくくって足を切り、両手を引きつけて右手で次の一手を探す、ピックはスカスカの柔雪を切るだけで、なかなか決まらない。半心狂乱になりつつも、あくまでクールさを装ってここを越えた。とてもグレードでは表せない。なんてアルパインクライミングはおもしろいんだ！

1ピッチ半ほど登ったところに、祐介が岩が張り出している場所を見つけた。トラバースし、もぐり込んでみると、掘ればなんとかテントが張れそうなスペースがある。片側は岩の出っ張りにぶつかり、幅は1mほどしかないが、横になれるだけで十分だ。いや、どんな高級ホテルをもってしても、この場所に敵うものはないだろう。なんせ、体を伸ばし横になってシュラフにもぐることができるのは3日ぶりなのだ。僕らは標高6600mのこの場所を「ホテル・カランカ」と命名した。そしてあとにも先にも、この壁のなかでテントを張ることができたのはこの場所だけだった。

テントの谷側30cmほどの下は空間だ。それも高さ1500mほどの。ただでさえ小さめなテントだが、ここでは互い違いに寝ることはできず、ひとりひとり順番にシュラフに入り、横を向いて眠るしかない。夜中に胸が締めつけられるようにきつくなり、顔を上げるとイッチーが仰向けになって寝ていた……。

どどどっ！ 雪崩がテントにぶつかる音で即座に目が覚めた。「ヤバいかも……」そう思っても祈るし

かない。幸いにして谷側をかすめただけで、しばらくしたら落ち着いたが、雪が積もって暗くなっていたテントの足元だけが明るくなっていた。

やまぬ嵐（9月19日～21日）

19日、登攀5日目、停滞。降雪が激しく、除雪に追われる。チリ雪崩は頻発、ときおり大きな雪崩の音で気分が滅入る。登ることは論外、下ることもできず耐えるしかない。予定の日数4泊5日は過ぎた。本気で食い延ばしに入る。

20日、登攀6日目、停滞。テントが埋まりそうなので、一度整地して張り直す。体力の消耗を防ぐため、ひたすら寝る。余計なことは考えないようにする。暖かい場所、すてきな食事。日本人ならさしずめ、温泉で寿司だろうか。こんな場所で見ると非現実的な夢は、僕らをいつそう惨めな気持ちにさせそうなものだ。しかし、テント内はクライミングの話で盛り上がる。なんて懲りない面々なのだろう。

21日、登攀7日目、停滞。この3日間の停滞で水分も十分に摂れず、ビスケットを数枚、マッシュポテトを数グラムしか口にしていないからだろう、末端の冷えが顕著になってきた。気にしないようにしていたが、ごまかせない。やはりこの高度でこの状況だと消耗するんだなど、いやに冷静に感心した。

夕方。少し晴れ間が見えたのが救い。それだけでも無性にうれしい。明日の朝は3時半に起床しようと話し合った。これだけ苦戦を強いられているのに誰ひとり下降を口にするのではなく、さも当然のようにアタックするつもりでいる。Amazingだ！ Fantasticだ！ ヒマラヤの壁をアルパインスタイルで登る意味なんて必要ない。こんなに素敵でおもしろいものが、ほかのどこにあるというのか！

最近、壁のなかにまで衛星電話を持ち込んで、遠いパソコンの前の予報ビジネス会社に電話してタイムリーかつ正確な天気予報を聞くことができるそうだ。

今回、デジカメ以外の電子機器をもっていない僕らは、チェコ隊に「日本人なのにパソコンを持ってこなかったのか!？」と冗談交じりにからかわれた。しかし私たちは壁のなかで悪天につかまり、絶え間なく流れるスノーシャワーに、登ることも退却することもできずに、ただ最も原始的な方法をとるしかなかった。それは祈り、そして耐え忍ぶこと。カランカ北壁に潜む何か、それが見えてきた気がする。

頂上へ（9月22日）

約束の時間に目を覚ます。するとどうだろう。テントを叩く雪の音が聞こえるではないか。シュラフの中でぼんやりと考える。そろそろ真剣に考えないと…そう思いつつも、再び眠りに就いた。

数時間が過ぎた。イチーが外をのぞく。晴れている。慌てて準備をし、外に出た。ひどいラッセルだ。3日間の運動不足のせいもあるだろう。ペースは遅々としてなかなか進まない。それどころか、雪が再び激しく降りだした。傾斜が急で、降った雪がそれなりに流れてくれるのが唯一の救いだ。

頂上へとつながるはずの大クーロワールをトラバースする。足元からはバサバサ雪が雪崩れていく。この3日半、雪は降り続いた。この大クーロワールが雪崩れたら、ひとたまりもないだろう。

6800m地点で僕らは話し合った。行くか、下るか。どちらが正解かといわれれば、それは下ることだろう。だが、下るということは、頂上を、未登のカランカ北壁にラインをつなげることを諦めるということだ。「降りたほうがいいんじゃないかな」。僕が言った。「そうだな…」と、イチー。

「まだ行けるんじゃない？ 行けるところまで行ったら？」と裕介。うれしい言葉だ。

僕らは決断をした。結果論では語りたくない。熱に浮かされていたわけではないと思う。冷静に状況を考えてそう決めたのだ。「行けるところまで行こう」と。

もはや15時過ぎ、下降中に暗くなるのは必然だ。迷わないようにロープを1本残して、イッチーが左上するクローワールに入る。頭上を岩壁に抑えられた個所では、裕介が的確なルートファインディングで次のクローワールへの道を見つけ出した。あとは体力勝負。体のだるさ、重さは半端じゃないが、ここで頑張らずに、いつ頑張るというのだ。雪深いルンゼの向こうには頂上稜線らしきものが見えている。

夕闇迫る17時半、稜上に張り出す雪庇を切り崩すと、そこより高い場所は周囲にはもうなかった。ナンダ・デビィはガスのなかで見えなかったが、かろうじてチャンガバンのサウスバットレスが見える。安堵感も焦燥感もなかった。ただ、着いたということ、それだけ。やっかいな下降がまだ残っている。

下降（9月23日）

23日、もはや、口に入れることのできる固形物は何もなかった。計15ピッチほどのラペルを繰り返して、ようやく氷河に降り立つ。すると、9日前には穏やかだった地形が一変して、危険なものになっていた。どうやらこの数日間で1.5mほどの降雪があったようだ。

あの雪のなか耐え忍んだ3日間は、日本人特有の粘りだったのかもしれない。冬の剣岳や谷川岳といった世界有数の豪雪地帯での登攀では、多少の悪天候も停滞も計画のなかに織り込み済み。天気が悪いから、状態がよくないからといってすぐに帰っていたら、登る機会はいつまでたってもやってこない。結果的に、忍耐と降雪後の状況判断が成功のカギとなった。もっとも、あの3日間がなかったら予定どおり4日間くらいで登れ、チャンガバンも最高のコンディションで登っていたかもしれない。

しかし、あの耐え忍んだ3日間があったからこそ、カランカ北壁がより激しく、印象深く、そして思い入れのあるものになったのは間違いない。僕らはこのラインを、「武士道」と名付けることにした。

カランカ北壁、9日間のアルパインスタイル。残してきたものは下降時にナッツ1個と数本のスリングだけ。これ以上ないシンプルなスタイルだった。ロープはメインロープ3本のみ。事前の試登なし、荷上げもなし、衛星電話もトランシーバーもなし、天気予報の入手もなし。もともと、未登のカランカ北壁の情報なんてほとんどなかったが、事前の情報の入手もなし。ベースキャンプから上はメンバー3人だけですべての荷物を背負い、登り、また降りてきた。僕らはひとつの線で頂上までをつなげたかったのだ。幾度となくトライされながらも、完成されなかったカランカ北壁というキャンパスに。

* * *

「エトピリカ」。アイヌ語で「くちばしが美しい」という意味をもつ海鳥の名前だが、葉加瀬太郎の代表的な曲の名前でもある。僕はヒマラヤに来るとき、本当に集中が必要なクライミング、登山のときはいつもこの曲を聴き、いろんなことをイメージしていた。アタックから11日ぶりにベースキャンプに戻ってきた翌朝、いまだ抜け切れない緊張感と少しの安堵感で早く目が覚めてしまった僕は、ひとり、シュラフの中でこの曲を耳にした。懐かしく切ない調べに心が満たされるとともに、これまでのいろいろなことが思い出され、そして涙が止まらなかった。

どうして僕らは生きているのか。どうして僕は登り続けるのか。今年の春、五竜で亡くなった新井裕己さんのこと、アラスカに消えた山田達郎、井上祐人のこと、不幸にして白馬で土砂崩壊にあった野間さんのこと。僕らのよき山仲間だった加藤慶信、そして中村進さんまでもがいなくなってしまった。

自分にとってクライミングとは何なのか？ それをあらためて考えていきたい。 了